

紹介

舞田敦編 『綱齋先生全集』 について

田尻 祐一郎

浅見綱齋（一六五二・承応元年～一七一・正徳元年）の文集としては、大きく二つの系統のものが知られている。近藤啓吾『増訂浅見綱齋の研究』（神道史研究叢書、臨川書店、平成二年）の「両種の浅見先生文集」が、甲本（不分巻）・乙本（十三巻）として紹介しているものがそれで、近藤氏は両者の関係について、まず綱齋の詩歌を中心として後に文を整理しようとして甲本が出来たものの、その作業は未完成のままに終わり、これを漢詩文集としての体裁に沿って継承したものが乙本で、詩・書・雑著・序・記・跋・書後・箴・贊・銘・啓・哀文・祭文・墓表という構成で完成に至ったものと判断している。乙本の編集者が、味池修居（三宅尚齋の姉の孫で、晩年の綱齋に学んだが、学統としては尚齋の系譜にある）であり、これを校訂して世に広く紹介したのは、山口剛齋であるという。それに対して甲本の編集が誰によってなされたのかは明らかではないが、近藤氏は、

編者は若林強齋であろうと推定している。それは、乙本が儒者の文集としての整った体裁を保つことに努めるのに対して、甲本は、綱齋の文章を（和歌や題名を欠いた文章なども含めて）忠実に収めたいという姿勢が顕著で、師の文章を一字一句そのまま残したいという姿勢は——誤解されそうなものについては訂正もはばからないという尚齋らの学派と違って——強齋が強く打ち出したものであり、げんに甲本は強齋の学派で好まれたと近藤氏は説く。いずれにせよ、この二つの文集は写本によって後学に伝えられた。

戦後、近藤氏は、かねて内田周平（遠湖）に託されていた『浅見綱齋文集』の出版を試み、それは昭和三十年から油印版で出された『浅見綱齋先生全集』三巻として実現した。その巻一には、基本的には乙本に拠りながら「綱齋先生文集」が収められた（ただし、和歌なども収められた。油印版で言われる「甲系本」「乙系本」は、『増訂浅見綱齋の研究』に言う「甲本」「乙本」と甲乙が逆なので注意する必要がある）。さらに巻二には、「綱齋先生雑話筆記」が、巻三には、「靖猷遺言講義」「四十六士論」などが収載された。さらに近藤氏は、この油印版をもとにしながら、新たに発掘された「常話筆記」などを加えて、平成元年、『浅見綱齋集』を刊行した（金本正孝氏との共編、国書刊行会）。一・靖猷遺言篇、二・詩文篇（浅見綱齋先生文集）、三・語録篇、四・道義諸篇という構成である。こうして今日、浅見綱齋の文集を読もうとすれば、この国書刊行会版の『浅見綱齋集』が、

ぺりかん社の〈近世儒家文集集成〉に収められた『綱齋先生文集』（相良亨・高島元洋・黒住眞・遠山敦編、昭和六十二年）を手にするのが普通であろう。ぺりかん社版の『綱齋先生文集』は、乙本（神奈川大学蔵）に拠っている。

ここまでは、前置きである。『山崎闇齋と其門流』（伝記学会編、明治書房、昭和十八年）の中に、舞田正養「綱齋先生全集編纂の由来」という一文がある。それは、

浅見子全書編纂に当つては、先君舞田敦が半生の心血を傾倒して、其の間、種々の曲折を流れて、大正四年先輩並びに同僚の協賛をうけて初めて完成されたものである。

で始まるもので、そこには、明治二十三年頃から綱齋の全集を作るべく、想像を絶する苦勞を重ねた父、敦氏の姿が描かれている。正養氏の筆にはこうある。

父は非常に綱齋先生に私淑してゐた。長州萩城東松本村に生れ、幼名徳重郎又は英作と称し、後敦に改めた。号は脱齋、蓋し「二程從二十四五時、便脱然欲学聖人」（語録）より出でたものである。幼にして郷先生新山波左馬に就き漢籍の素読を学び、嘗て明倫館の試業を受け、後松下村塾に入り句読を馬島先生に受け玉木文之進即ち団子岩先生の門に学び、又は太田程輔先生の門に学んだ。明治九年十月にはかの前原一誠の起した乱に遭ひ弾丸雨飛の間を奔走したのである。

この父は、道学協会の分裂といった「曲折」をくぐりながら、勤皇の儒者としての綱齋への思いを募らせて、文字通り「半生の心血を傾倒して」綱齋の遺著を蒐集することに全力を尽くしたのである。こうして蒐集された文献のほとんどが写本であるから、それらの校訂は困難を極めたであろうが、舞田氏は独力でその作業を進めて、それらを整理して浄書することで、全六十八巻の『綱齋先生全集』が出来上がった（編纂事業の形式的な母体としては浅見綱齋先生遺著編纂会）。

その凡例は、「本書ハ先儒浅見綱齋先生ノ遺著ヲ編纂シタル者ナリ」から始まるが、その三条には、

本書収載スル所、講義アリ、著述アリ、編録アリ、詩歌アリ、手簡アリ、而シテ門人ノ筆記ニ係ル講義ニシテ、師説ト題スルモノ最モ多シ。是ハ先生ガ自ラ執筆シタルニ非ズト雖モ、其ノ口吻精神ヲ直写シタルモノナレバ、自著ト異ナルコトナシ。是レ皆概稱シテ遺著ト曰フ所以ナリ。

とあって、この膨大な『綱齋先生全集』の特徴を言い尽くしている。全六十八巻の構成は、同書の四〇七頁から四〇九頁に記載されているのでそちらを見られたいが、巻一・年表、年譜略、実紀、巻二・文集（和歌・謡曲・漢詩）、巻三・文集（漢文）、巻四・文集（漢文）巻五・手簡として始まり、「語類」「靖献遺言」などが続き、さらに「白鹿洞書院揭示集注講義」「大家商量集講義」「玉山講義師説」「拘幽操師説」「敬齋箴師説」「社倉法師説」といった闇齋学派によって重んじられた朱子学の基本

文献の講義類が並び、また「四書」は当然として、「太極図説」「性理字義」「西銘」などの講義、「敬義内外」をめぐる議論が収められている。なかでも「易学啓蒙講義」に始まる『易』に関する文献の充実ぶり（巻五十四から巻六十三まで）が注目される。まさに、網斎の思想世界の「全体大用」が尽くされている。

この舞田敦編の『網斎先生全集』は、その後どうなったのだろうか。浄書されたまま、刊行されることはなかった。それは正養氏が、

然し乍ら我に力無く此の全書が未だに世に出でて斯学に尽すなく父の墨痕の儘に篋底に蔵されてある事を思ふと、又、子として深く残念に思ひ、同時に関係者一同の遺憾に感ずる所である。

と述べる通りである。そして不思議なことだが、その後、これに言及されることもなかったというのが実態だったようである。多くの人は、それが戦災にあつて無に帰してしまったものと考えたのかもしれないし、あるいは何か、私たちには分からない事情があつたのかもしれない。近藤氏の油印版『浅見網斎先生全集』や国書刊行会版『浅見網斎集』の序文、ベリかん社版の『網斎先生文集』などの解説などにも触れられていない。しかし、実は舞田敦氏が大正十一年に亡くなってからも、戦前・戦中・戦後を通じて、ご子息の正養氏、さらにそのご子息・ご家族がこの浄書群を大切に、一冊として欠けることなく丁寧に保管してこられたのである。

この『網斎先生全集』が、大正四年の完成から実に百年近い時日を経てこの度、舞田家ご当主のご好意と三浦國雄先生（大東文化大学名誉教授）はじめ関係された皆さんのご尽力で、大東文化大学の図書館に収蔵されることとなった。闇齋学派の研究には、他の儒学者の場合と異なった難しさがある。それは、公刊された著作の少なさと、綿々と書き継がれた「講義」や「師説」といった史料の余りの膨大さである。闇齋学派の学者たちは、ひたすらそれらを読み、書き写し、それでもつて師の口吻に迫ろうとした。こういう学問の形があつたのである。思えば、舞田敦氏の仕事もまたそうだったのだろう。そういう学問の形自体が、出来上がった学説を学ぶことよりも、テキストに向き合う師の姿勢そのものを学ぶべきだとする、この学派の思想的な特質をよく現しているのだが、それらの史料群がほとんど手付かずで全国の幾つかの図書館などに眠っている。思想的には勿論、国語学的にも、あるいは知の伝播・継承といった観点からも興味尽きないこれらの写本は、多くの場合、まだまだ活用されていないままなのである。今回、大東文化大学の図書館に舞田敦編『網斎先生全集』が収蔵され利用が便利になったことは、こういう意味からも、学界にとっても大変に嬉しいニュースなのである（出来れば、これが出版されてより多くの研究者の手に置かれれば何よりなのであるが、それには「先立つモノ」が要るとのこと）。

偉大な思想家が亡くなった時、その弟子たちは師の文稿を後世に伝えようとするだろう。その時、師の文言をそのままに、むしろ忠実に残そうとする者がいる。しかしそれは、実は色々な意味で難しいことだし、後世の人々に対して不親切だということもあるだろう。誤解しやすすい箇所は、師の真意が正しくわかるように補正しておくべきだという意見も当然ありうる。しかるべき様式に整えて残さなければならぬと主張する者もいるだろう。また、師の講義や折々の発言を弟子が記録していたとしたら、それらの記録を収めるべきなのか、これは一般論で片付くような簡単な問題ではない（孔子の在天の霊は、『論語』を読んで、自分はこのことを言った覚えはないと呟いているかもしれない）。しかし、そういう記録も「自著ト異ナルコトナシ」という信念で大切に残してくれた人々がいて、その思いを無にさせまいとする家族や子孫があつて、ここにこうして信じ難いような史料が現われたのだ——過日、三浦先生の研究室でこの『網齋先生全集』を見せていただいて、こんな余計なことまで考えた。

（東海大学教授）

フランスにおける中江兆民と幸徳秋水の著作の出版

米原 謙

日本の漫画や近現代の作家の文学作品がフランスで大衆的な人気を博していることは、すでによく知られた事実であろう。しかし近年、フランスで近代日本の政治思想の古典が精力的に出版されていることは、日本の研究者には意外に知られていない。代表的なものとして福澤諭吉の『福翁自伝』(*La vie du vicomte Fuzuzawa racontée par lui-même*, Traduit par Marie-Françoise Teller, Editions Albin Michel, 2007) や『福澤全集緒言』(*Plaidoyer pour la modernité: Introduction aux œuvres complètes*, Traduit par Marion Saucier, CNRS Editions, 2008) などもあるが、ここでは中江兆民と幸徳秋水のフランス語訳について紹介したい。

対象として取り上げるのは以下の本である。クリスチン・レイ／エディ・デュフルモン共訳『三酔人経綸問答』(*Dialogues Politiques entre trois ivrognes*, CNRS Editions, 2008, Traduit par Christine Levy et Eddy Dufourmont) エライ・デュフルモン／ロレン・ジュルダン共訳『一年有半・続一年有半』(*Un an et demi, Un an et demi suite*, Les Belles Lettres, 2011, Traduit par Eddy Dufourmont et Romain Jourdan) クリスチン・レヴィ訳『二十世